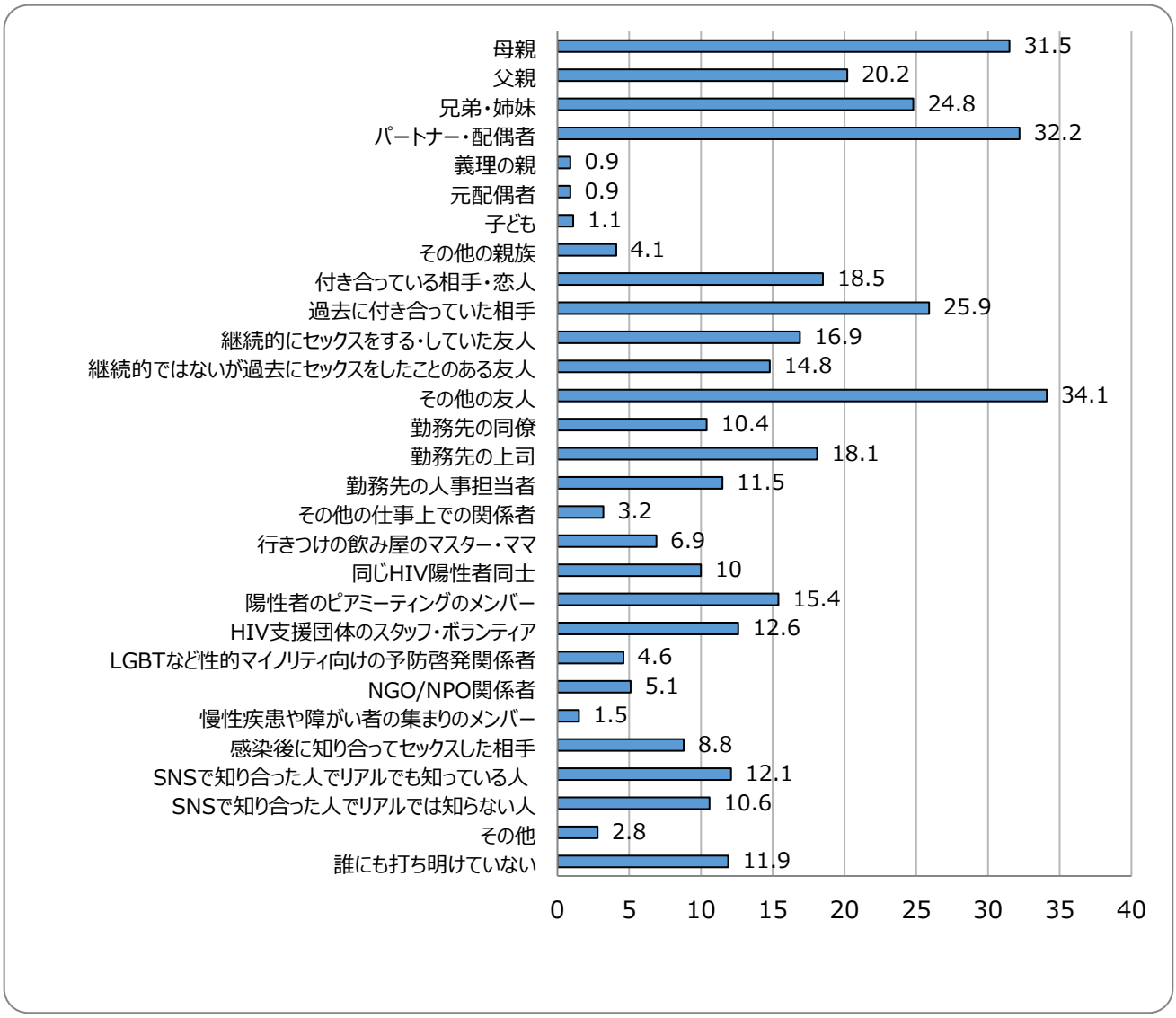
7. 周囲の人々

■HIV 陽性者であることを伝えること（図 7-1）

伝えた相手としてもっとも多くあげられたのは、「その他の友人」で 34.1%、次いで、「パートナー・配偶者」32.2%、「母親」31.5%でした。「誰にも打ち明けていない人」は 11.9%で、第 3 回調査の 10.2%よりも多くなっていました。第 4 回調査より、SNS で知り合った人を選択肢に加え、「SNS で知り合ったリアルでも知っている人」は 12.1%、「SNS で知り合ったリアルでは知らない人」は 10.6%でした。第 4 回調査では 4 割を超えた項目はなく（第 3 回では「その他の友人」が 41.5%）、各々が幅広い相手から選択し、HIV 陽性者であることを伝えている様子が伺えます。

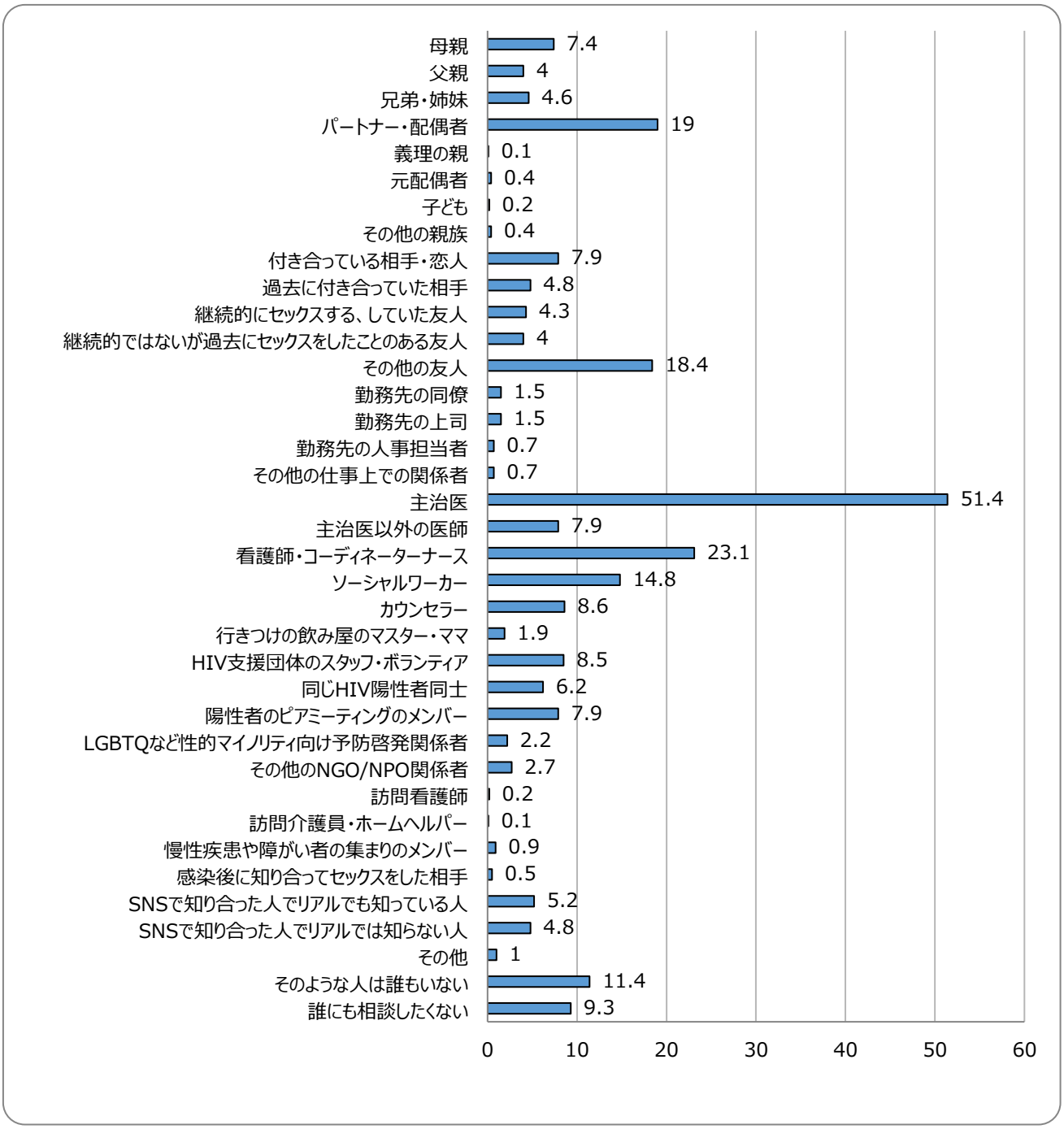
図 7-1 HIV 陽性者であることを伝えた相手（%, N=810, 複数回答）



■HIV に関連した悩み事の相談相手（図 7-２）

HIV に関連した悩み事の相談相手として最も多くあげられたのは「主治医」で、51.4%と半数を超えていました。次いで、「看護師・コーディネーターナース」が 23.1%、「パートナー・配偶者」が 19.0%でした。医療従事者が多い傾向は、第３回調査と同様でした。「そのような人は誰もいない」と回答した人が 11.4%で、第３回の 7.3%より増加していましたが、「誰にも相談したくない」と回答した人は 9.3%で第３回の 9%とほぼ変化はありませんでした。

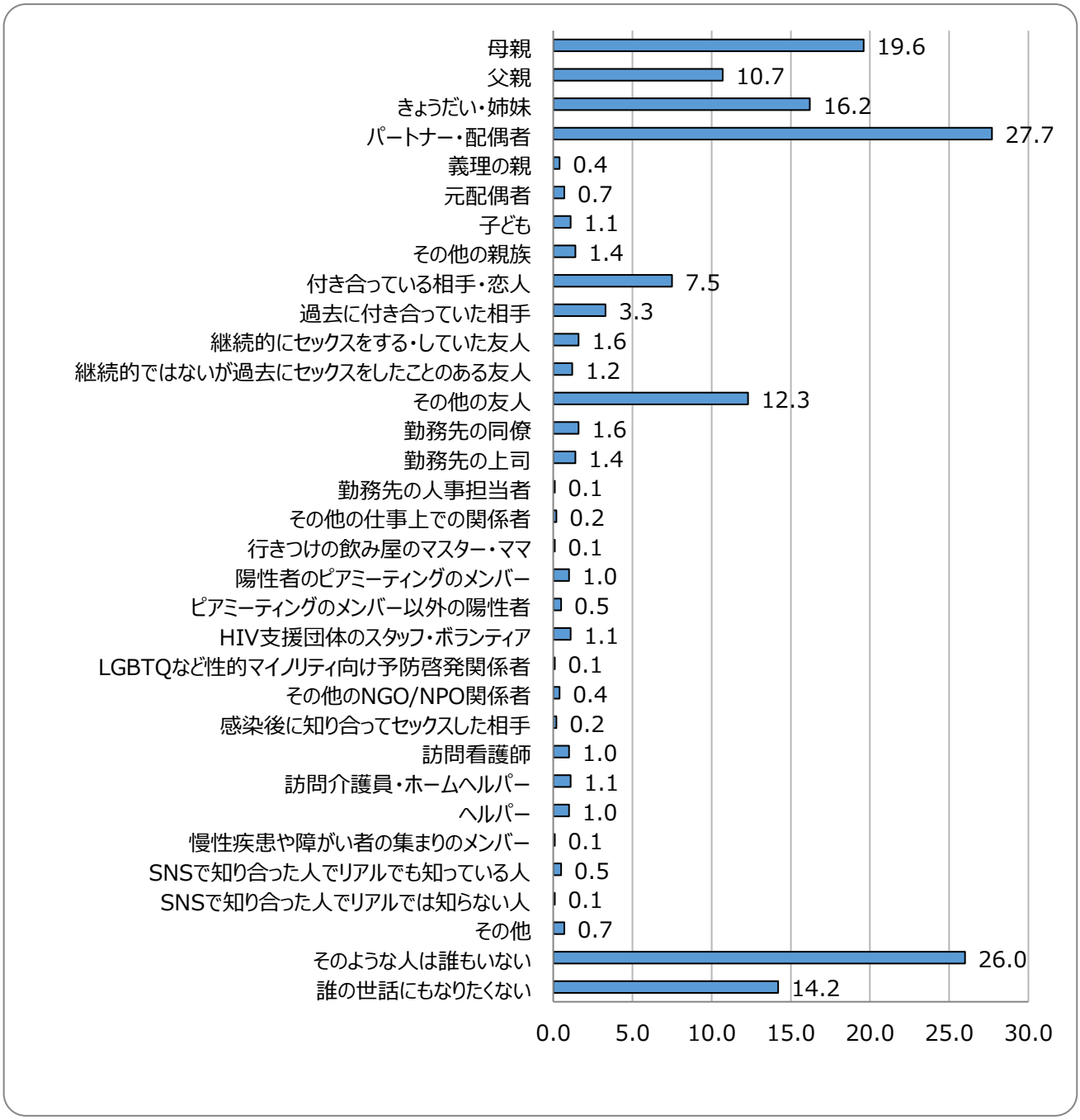
図 7-2 HIV に関連した悩み事の相談相手（%, N=810, 複数回答）



■体調が悪くなった時に病院への付き添いや介助をしてくれる人（図 7-3）

「パートナー・配偶者」と回答した人がもっとも多く、27.7%でした。次いで「そのような人は誰もいない」26.0%、「母親」19.6%の順で多くなっていました。「HIV 支援団体のスタッフ・ボランティア」は 1.1%、「ヘルパー」が 1.0%であり、家族やパートナー以外の資源をあげる人が少ないのは第 3 回調査と同様でした。また、14.2%が「誰の世話にもなりたくない」と回答していました。引き続き、体調が変化した際のサポート源が十分ではない可能性が伺えます。

図 7-3 体調が悪くなった時に病院への付き添いや介助をしてくれる人
（%, N=810, 複数回答）



■HIV に関連するスティグマ

HIV に関連するスティグマとは、「HIV や AIDS とともに生きている、あるいは関連のある人を低く評価するプロセス」（UNAIDS,2003）とされ、HIV 陽性者に対する不公平・不正義な扱いへとつながり、差別や偏見を生じさせていることが指摘されています。

この調査では、スティグマを「HIV に対する社会からのスティグマの感じ方」、「HIV に対するスティグマにまつわる経験の多さ」、「スティグマを避けるための行動の自主規制」の３つの側面から確認しています。第 4 回調査では、各項目に対して、「HIV 陽性であることがわかってから 1 年前まで（以下、過去）」と、「この 1 年間（以下、直近）」についてそれぞれお聞きしました。集計は「過去」と、「直近」の両方に回答した人のみを対象にしています。

■HIV に対する社会からのスティグマの感じ方（図 7-4）

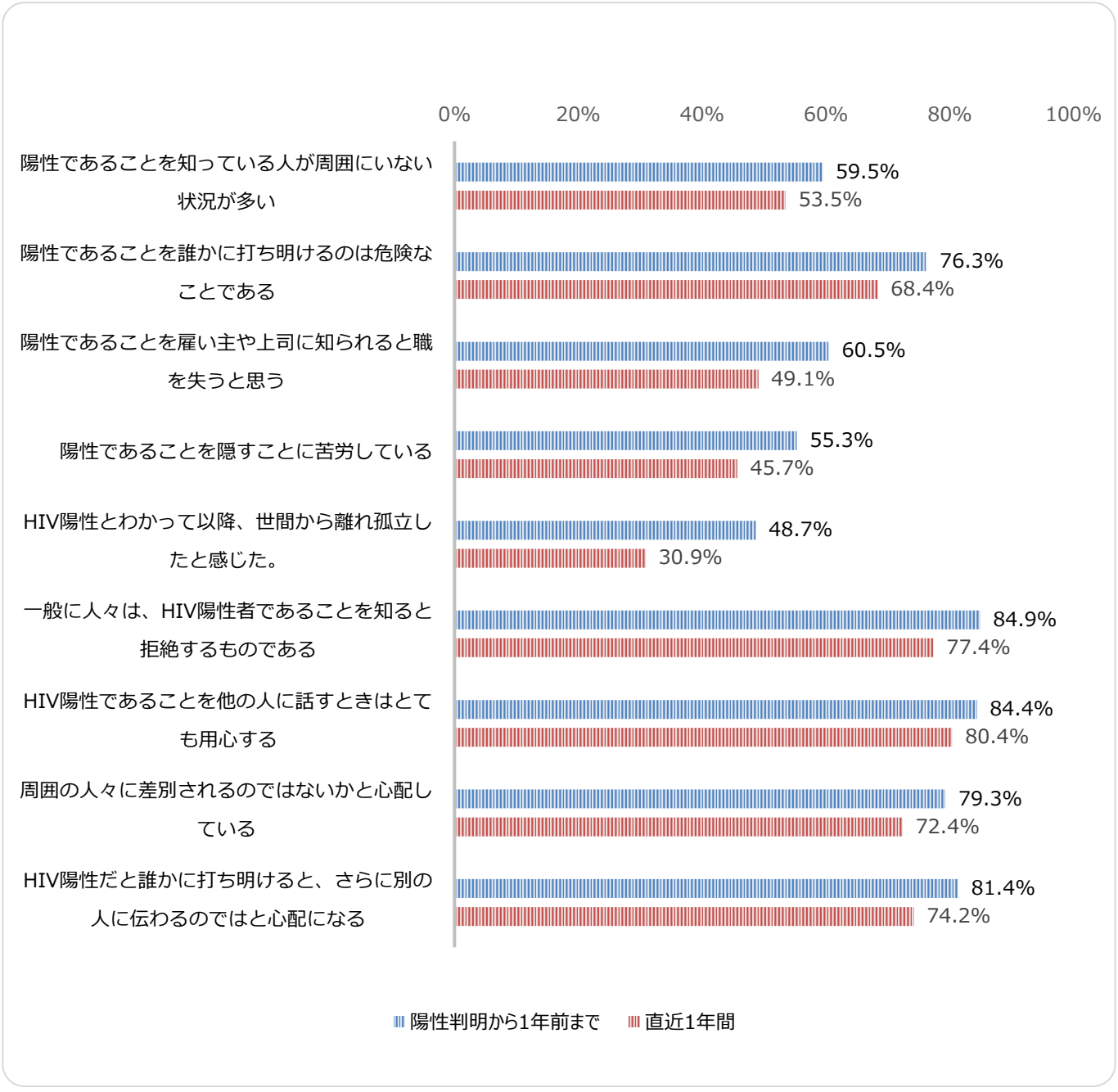
HIV に対する社会からのスティグマについてどのように感じているかを 9 項目で質問し、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の 4 段階で回答いただきました。「まったくそうではない」「あまりそうではない」を「そうでない」、「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」の 2 つに分け、「そうである」の割合（%）を示します。すべての項目において、「過去」とくらべて、「直近」では、「そうである」と回答した人の割合が低くなっていました。

過去直近ともに「そうである」と回答した人の割合が高かったのは、「一般に人々は、HIV 陽性者であることを知ると拒絶するものである」、「HIV 陽性であることを他の人に話すときはとても用心する」、「周囲の人々に差別されるのではないかと心配している」、「HIV 陽性だと誰かに打ち明けると、さらに別の人に伝わるのではと心配になる」の 4 項目であり、直近でも 7 割強から 8 割の人が「そうである」と感じていました。特に「HIV 陽性であることを他の人に話すときはとても用心する」では、過去が 84.4%、直近が 80.4%とほとんど変化がありませんでした。未だ、HIV に対する社会一般からの偏見を強く感じている人が大半であることがわかります。

さらに、「HIV 陽性であることを雇い主や上司に知られると職を失うと思う」と感じている人は直近でも 49.1%であり、過去の 60.5%よりやや低下しているものの、HIV 陽性であることを知られることに対する恐怖を職を失うといった具体的なものとして捉えている人が半数近くであることがわかりました。

一方で、「HIV 陽性とわかって以降、世間から離れ孤立したと感じた。」では、過去が 48.7%であったのに対し、直近は 30.9%と約 18 ポイント低下していました。孤立感は、陽性判明後の時間の経過とともに和らいでいく可能性が示されました。

図 7-4 HIV に対する社会からのスティグマの感じ方(n=790-793)



注：項目によって回答数は異なる。

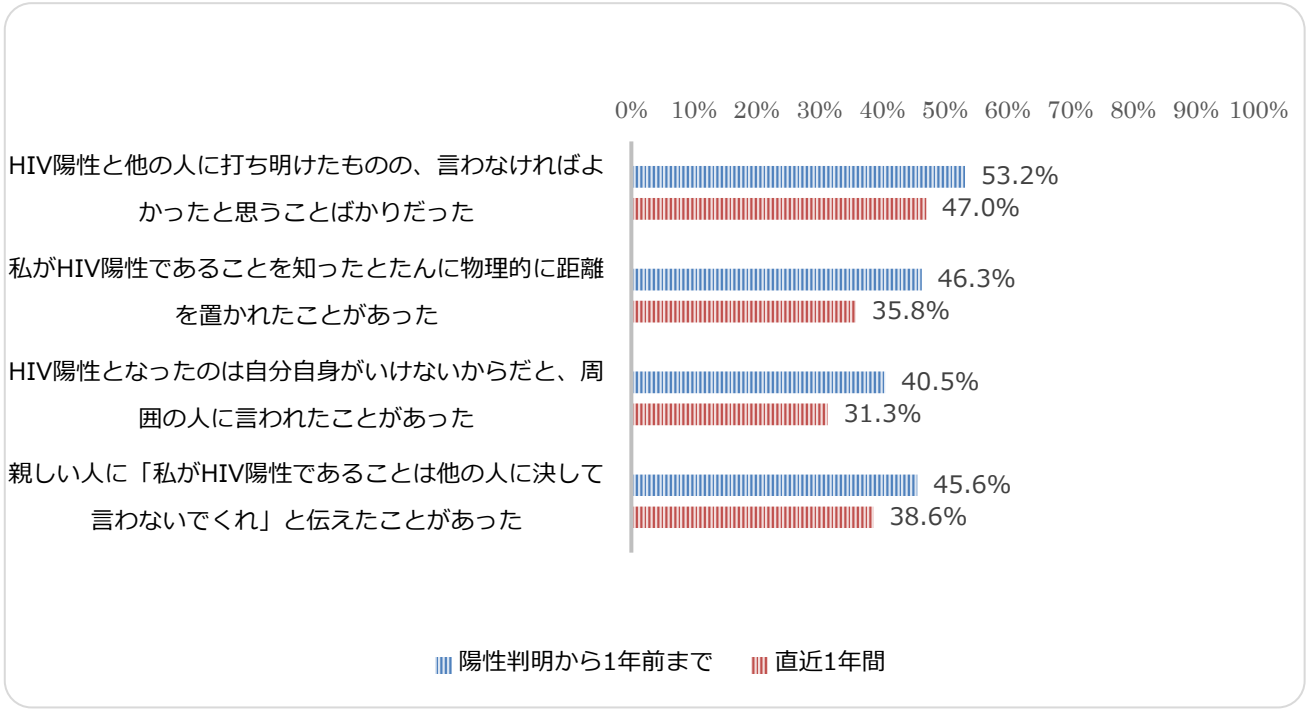
■HIV に対する社会からの偏見にまつわる経験（図 7-5）

実際に HIV に対する偏見を感じるような経験をしたかどうかを 4 項目で質問し、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の 4 段階で回答していただきました。

「まったくそうではない」「あまりそうではない」を「そうでない」、「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」の 2 つに分け、「そうである」とした人の割合（%）を示します。

4 項目すべてにおいて、「そうである」と回答した割合は過去に比べて直近で低下していました。陽性判明後の年数が 1 年以上の場合は、直近 1 年間の方がそれまでの期間より短くなり、質問のような経験をする機会が単純に少なかった可能性も考えられます。その中でも、「HIV 陽性と他の人に打ち明けたものの、言わなければよかったと思うことばかりだった」と感じている人は、直近でも 47.0%と半数近くおり、HIV 陽性であることによるネガティブな実体験が継続していることがわかります。

図 7-5 HIV に対する社会からの偏見にまつわる経験（N=790-793）



注：項目によって回答数は異なる。

■HIV に対する社会からの偏見による行動の自主規制（図 7-6）

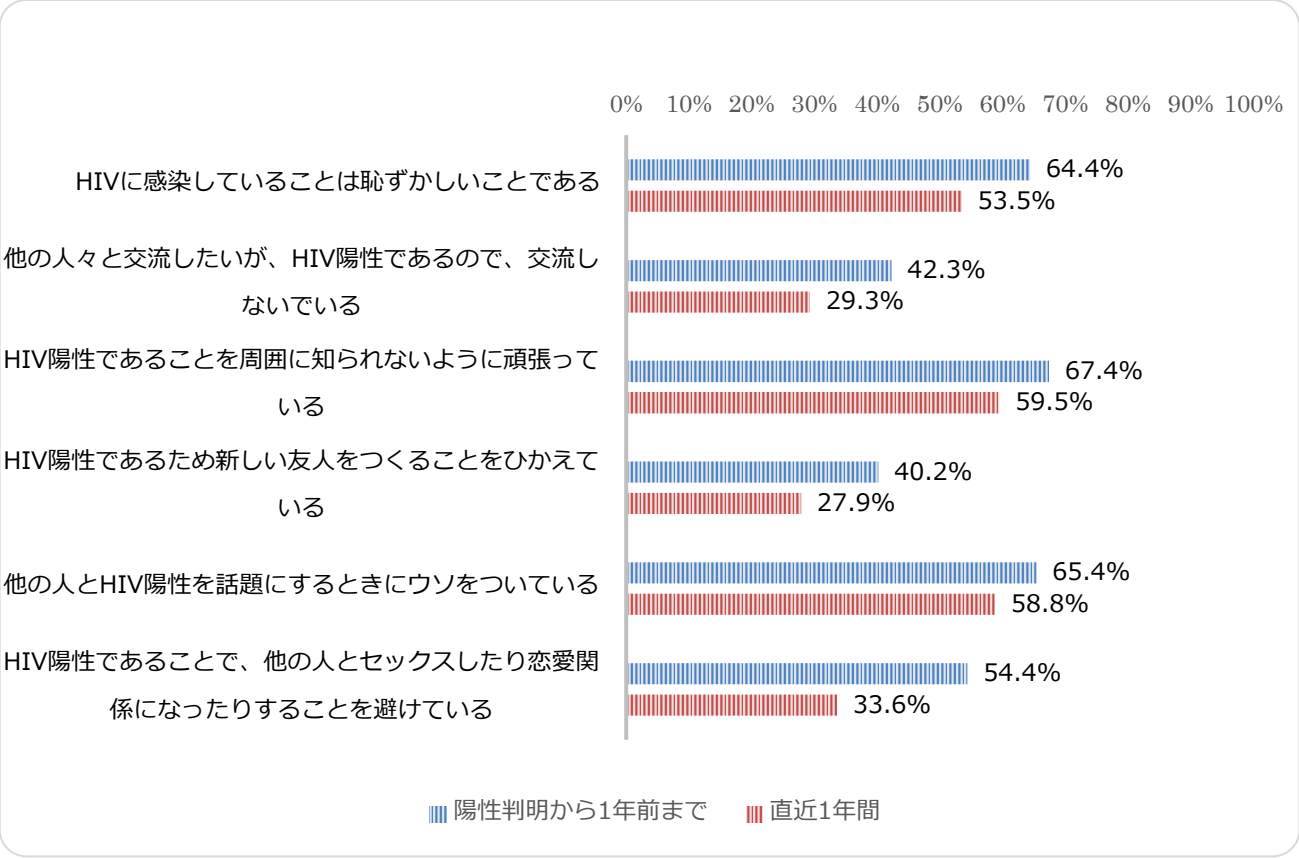
HIV に対する社会からのスティグマを感じ、そのために、自らの生活について自主規制としてとらざるを得ない行動について 6 項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「そうではない」「どちらともいえない」「ややそうである」「とてもそうである」の 5 段階で回答する形式です。「まったくそうでない」「そうではない」は、「そうでない」、

「ややそうである」「とてもそうである」は、「そうである」、「どちらともいえない」はそのままとし、3 つに分けました。「そうである」とした割合（%）について結果を示します。6 項目すべてにおいて、「そうである」と回答した割合は過去に比べて直近で低下していました。

過去直近ともに「そうである」と回答した割合が高かったのは「HIV に感染していることは恥ずかしいことである」、「HIV 陽性であることを周囲に知られないように頑張っている」、「他の人と HIV 陽性を話題にするときにウソをついている」の 3 項目で、直近でも 6 割弱の人が周囲に隠すために「嘘をつく」「頑張る」などの行動の自主規制を行っていました。

一方で、「他の人々と交流したいが、HIV 陽性であるので、交流しないでいる」では、直近で「そうである」は 29.3%、「HIV 陽性であるため新しい友人をつくることをひかえている」では、直近で「そうである」が 27.9%であり、他の人々との交流を実際に控えている人は、3 割程度に留まっていました。「HIV 陽性であることで、他の人とセックスしたり恋愛関係になったりすることを避けている」については、過去は半数以上が自主規制を行っていましたが、直近では約 3 割に低下しており、過去と直近の変化が比較的大きいことがわかりました。

図 7-6 HIV に対する社会からの偏見による行動の自主規制（n=790-793）



注：項目によって回答数は異なる。

■ゲイ・バイセクシュアル・レズビアン・トランスジェンダー・クエスチョニングに対するスティグマについて（図 7-7）

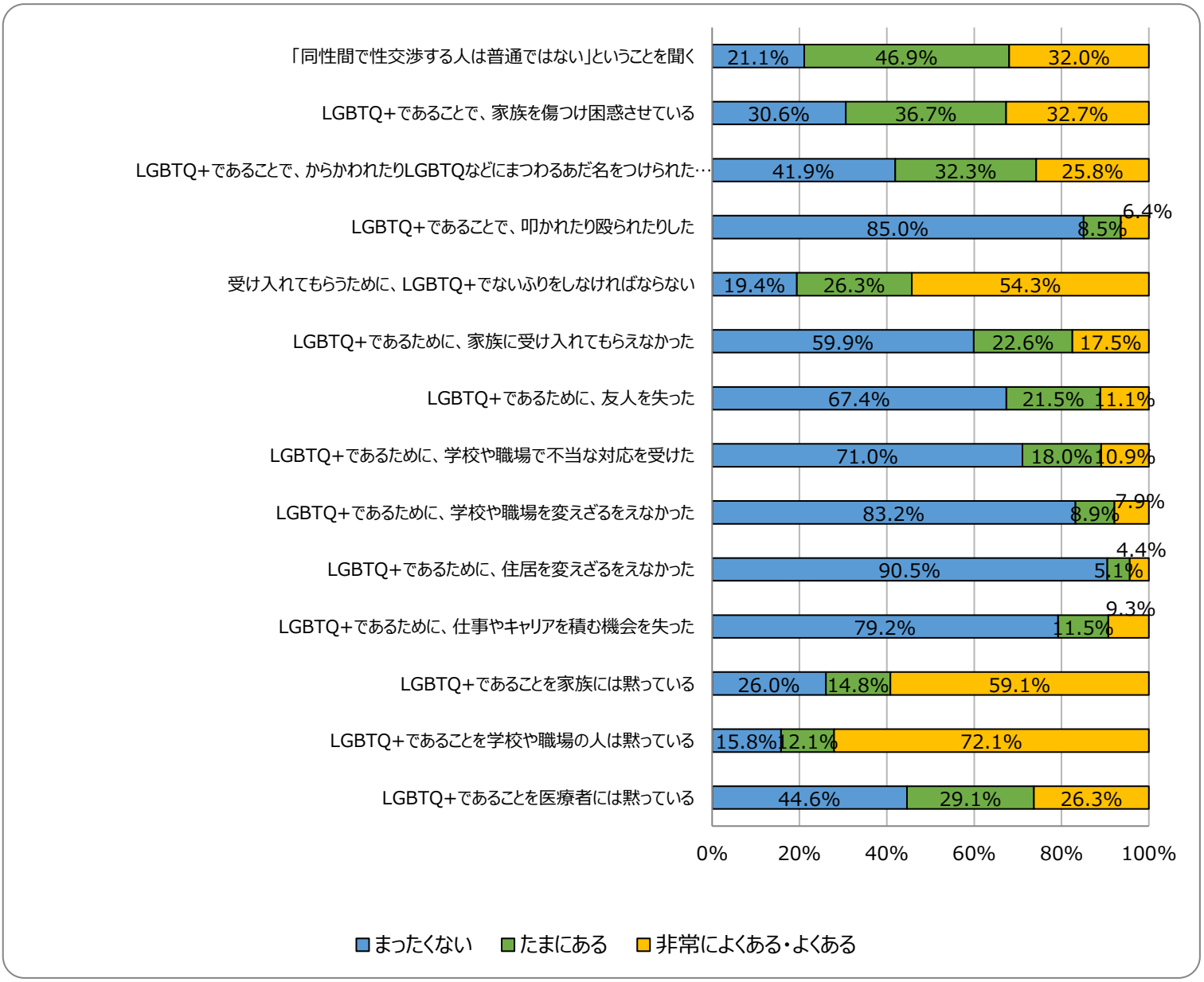
ゲイ・バイセクシュアル・レズビアン・トランスジェンダー・クエスチョニング（以下 LGBTQ+）に対する偏見に関連する状況について 14 項目で質問しました。各質問は、「まったくない」「たまにある/あった」「よくある/あった」「非常によくある/あった」の 4 段階の回答形式となっています。「よくある/あった」と「非常によくある/あった」を統合して「よくある」とし、「まったくない」、「たまにある」、「よくある」の 3 分類として、結果を示しています。セクシャリティに関する質問でゲイ・バイセクシュアル・レズビアン・トランスジェンダー・クエスチョニングに属していると回答し、かつ 14 項目すべてに回答した 749 名を対象に集計しました。

「LGBTQ＋であることを家族には黙っている」では、「よくある」が 59.1%であり、前回調査の 65.9%よりは低下したものの、6 割が家族に LGBTQ＋であることを隠していました。また、「自分が LGBTQ＋であることで、家族を傷つけ困惑させている」では、「たまにある」「よくある」を合わせると 7 割近くであり、前回調査と同様の傾向でした。一方で、家族に自身のセクシャリティを隠していることが多いことが影響している可能性がありますが、「LGBTQ＋であるために、家族に受け入れてもらえなかった」では、「よくある」は 17.5%とそれほど多くはありませんでした。

家族以外との関係については、「受け入れてもらうために、LGBTQ＋でないふりをしなければならない」で、「よくある」は 54.3%であり、前回（55.8%）とほぼ変化がなく、6 割近くの人が受け入れてもらうために、LGBTQ＋であることを隠すための行動をとらざるを得ない状況にありました。「LGBTQ＋であるために、友人を失った」では、「よくある」は 11.1%、「まったくない」は 67.4%であり、友人関係への影響は比較的少ない様子でした。「LGBTQ＋であることを学校や職場の人には黙っている」では、「よくある」は 72.1%であり、学校や職場といった場では、LGBTQ＋であることは公にしない人が大半でした。「LGBTQ＋であることを医療者には黙っている」では、「よくある」は 26.3%、「まったくない」は 44.6%であり、半数近くの人が医療者に LGBTQ＋であることを伝えていることがわかりました。

LGBTQ＋に関するスティグマの結果は、全体として第 3 回調査と大きな変化はありませんでした。

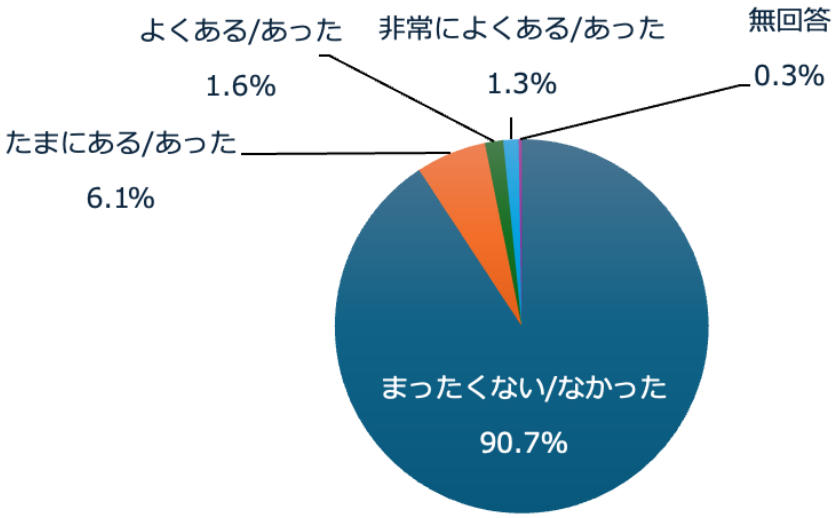
図 7-7 LGBTQ+に関するスティグマ（n=749）



■医療スタッフとのやりとりにおける LGBTQ に対する偏見・無理解

LGBTQ756 人に、医療スタッフとのやりとりの中で LGBTQ＋についての偏見や無理解を感じた経験について尋ねたところ、「たまにある／あった」「よくある／あった」「非常によくある／あった」（以下、〈経験あり〉）と回答した人は 68 人（9.0%）でした（図 7-8）。

図 7-8 過去 5 年間に医療者とのやり取りで経験した LGBTQ+に関連する偏見・無理解（n=756*）



＊LGBTQ であると回答した 756 人を分析対象とした。

性的指向等の属性別にみると、〈経験あり〉と回答した人はゲイ 54 人（8.1%）、バイセクシュアル 9 人（12.0%）、レズビアン 3 人（100.0%）となりました。また、トランスジェンダーでは 3 人（25.0%）、シスジェンダーでは 65 人（8.7%）が〈経験あり〉と回答しています。なお、括弧内の数字は各属性における〈経験あり〉の割合を表しますが、レズビアンやトランスジェンダーなど一部の属性については回答者数が少ないため、割合の解釈には留意が必要です。

〈経験あり〉と回答した人のうち、50 人からは具体的な内容について自由記載がありました。表情や態度、雰囲気等によりなんとなく感じたという記載もみられたものの、以下に紹介するように具体的な言動を挙げたものもみられました。

医療スタッフによる差別的な言動について、「侮蔑発言」「噂話のようなネタにされた」「ヘイト発言」といった回答がありました。また、カルテに「ほら、こんなにオネエ言葉」と記載されていたとの回答もありました。ゲイ男性を性的に活発であるとみなす偏見に関連して、「性に奔放なこと」「セックスにだらしないと思われている」といった回答や、「初診時に〔マッチング〕アプリを使用しているかという質問（アプリはセックス目的で使用しているという前提で）」をされたとの回答がありました。

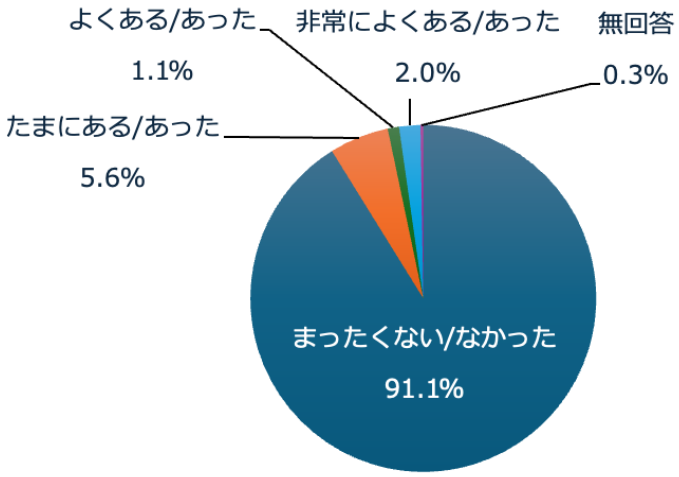
セクシュアリティについての詮索として、「興味本位での質問」「近所の病院へ行った時にどうして HIV に感染したのか？ホモか？とか執拗に質問されて屈辱感を味わう事があった」「HIV とは関係の無い入院で感染経路をしつこく聞かれた」といった回答がありました。また、「セクシュアリティについては何も言ってないのに HIV 陽性であることで勝手にゲイ扱いされた」との回答もありました。一方で、セクシュアリティに関する話題を避けられていると感じた人もおり、「性に関する話題を避けられていたように感じた」「異性の担当だとどうしても表面的な部分しか話せない」といった回答がありました。

このほか、HIV 陽性であることに関して、他の患者の前で病名を口頭で話されたなどプライバシーへの配慮に欠けた対応があった、感染防御のためとみられる過剰な対応をされた、といった回答もありました。

■周囲の LGBTQ+に対する偏見・無理解による通院・健康管理への影響

家族や職場など周囲の人々の LGBTQ に対する偏見や無理解によって、通院・健康管理に支障が生じたり、そのための行動をためらったりした経験について尋ねました。その結果、「たまにある／あった」「よくある／あった」「非常によくある／あった」（以下、〈経験あり〉）と回答した人は 65 人（8.6%）でした（図 7-9）。

図 7−9　過去 5 年間の周囲の LGBTQ+に関連する偏見・無理解の影響による通院・健康管理の困難（n=756＊）



＊LGBTQ であると回答した 756 人を分析対象とした。

性的指向等の属性別にみると、〈経験あり〉と回答した人はゲイ 53 人（7.9%）、バイセクシュアル 7 人（9.3%）、レズビアン 3 人（100.0%）などでした。トランスジェンダーでは 5 人（41.7%）、シスジェンダーでは 60 人（8.1%）が経験ありと回答しています。括弧内の数字は各属性における〈経験あり〉の割合を表しますが、ここでも、一部の属性については該当する回答者数が少ないことに留意が必要です。

〈経験あり〉と回答した人のうち、49 人からは具体的な内容について自由記載がありました。通院や健康管理に直接的にはかかわらないと考えられる回答も含まれていましたが、家族や職場などの周囲の人々との関係において、LGBTQ+であることや HIV 陽性であることによって困難を抱えている状況がうかがわれました。
家族からの影響として、「母から田舎の保健所でなく都会の保健所で検査を受けた方がいいと言われた」との回答や「母親や姉に気持ち悪いと言われてて精神的に辛くなった」などの回答がありました。

職場との関係では、「会社の上司にあだ名をつけられる、ばかにされる」「スマホの待ち受け画面に彼氏の画像を設定したら職場の人に嫌がらせされた」といった回答や「同僚が『ゲイの人は何の病気持ってるかわからないから』と言っていた。自分のことを言われた訳ではないけど、不愉快だった」といった回答がありました。

職場に関する内容では通院の困難をめぐって、「定期的な通院のために仕事を半休にした時、しつこく病名を尋ねてきたり、過去には病院まで尾行されたことがあった」といった回答がありました。このほか、「職場で休日取得の際に理由を聞かれた。通院と答えるとどこの病院か聞かれた。急性期でもないのにその病院に度々通院できるのはおかしいと言われた」「通院頻度と診療科のごまかしに苦労する」といった回答もありました。

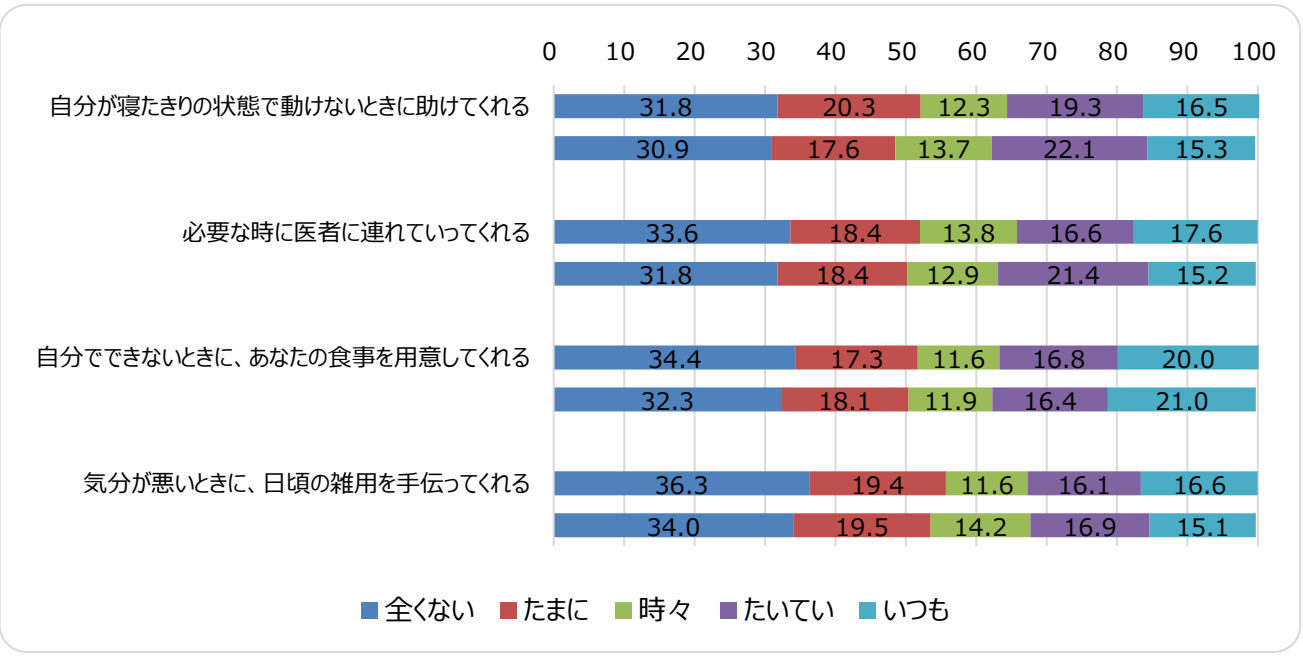
服薬について、「薬を飲むところを見られないように気をつけている」「薬の服用をやめる」といった回答がありました。また、HIV 以外の疾患で医療機関を受診する際の経験について、「知人の歯科医に陽性である事を内緒で受診した」「一般的な受診の際に、陽性者であることがバレたくない」「かかりつけ医に行ったときに HIV の治療を伝えられない」といった回答がありました。

■ソーシャルサポート

体調を崩してしまった等の困ったときに助けてくれたり、一緒に楽しい時間を過ごしたり、周囲の人々からの有形無形のサポートをソーシャルサポートといいます。今回の調査では、ソーシャルサポートについて、「移動の助けをしてくれる」、「食事を用意してくれる」等の手段的サポート、「一緒に楽しいときを過ごしてくれる」、「アドバイスをしてくれる」等の情緒的サポートの 2 種類を、それぞれ 4 項目ずつ、「全くない」「たまに」「時々」「たいてい」「いつも」の 5 段階でお答え頂きました。グラフの上の段は第 4 回調査、下の段は前回の第 3 回調査の結果です。

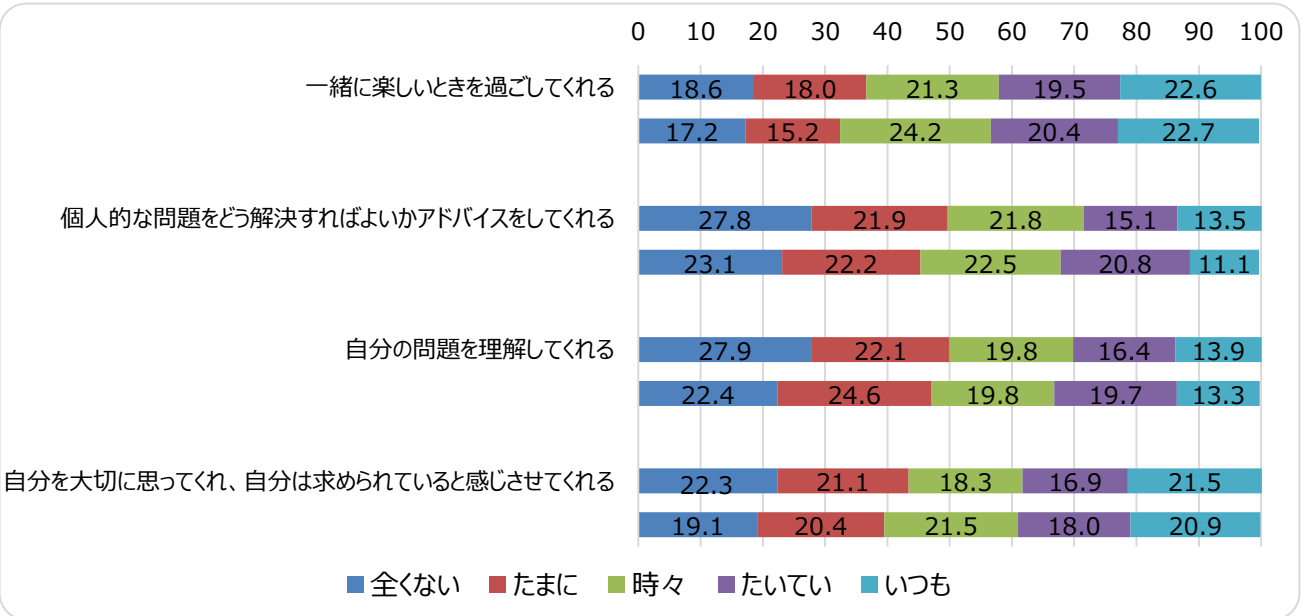
手段的サポートについては、すべての項目で 3 割が「まったくない」と回答していました。体調を崩すなどのサポートが必要な状況において、サポートが十分得られない可能性があります。「まったくない」と回答した割合はすべての項目でやや増加していました。

図 7-10 ソーシャルサポート：手段的サポート（%, N=800）



情緒的サポートについては、全ての項目で「まったくない」と回答したのは、20%程度で、手段的サポートよりも低くなっていました。「一緒に楽しいときを過ごしてくれる」については、「たいてい」「いつも」と回答した人の割合を合わせると 4 割を超えており、他の項目に比べ高くなっていました。手段的サポート同様、「まったくない」と回答した割合は第 3 回調査に比べて、すべての項目でやや増加していました。

図 7-11 ソーシャルサポート：情緒的サポート（%, N=800）

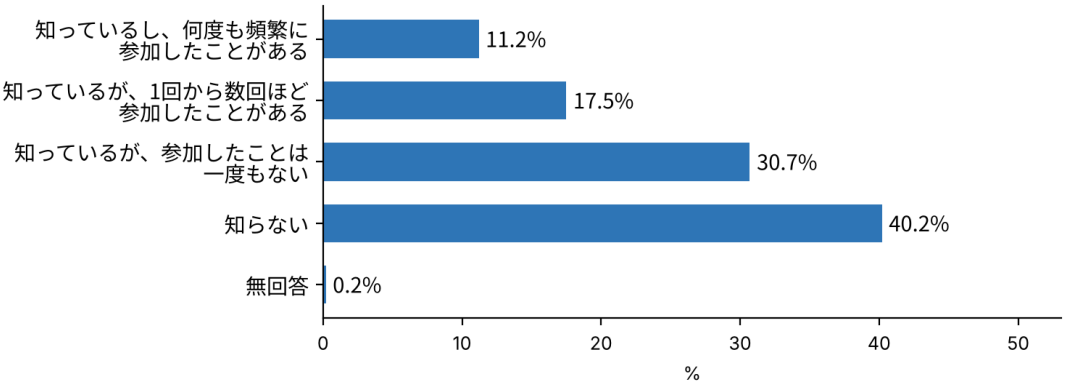


■ピアミーティングの認知と参加経験（図 7-12）

HIV 陽性者同士が同じ立場で支え合う場（ピアミーティング）について、知っているか、参加したことがあるかを尋ねました。「知っているし、何度も頻繁に参加したことがある」は 11.2%（91 人）、「知っているが、1 回から数回ほど参加したことがある」は 17.5%（142 人）で、参加したことがある人は合わせて 28.8%（233 人）でした。「知っているが、参加したことは一度もない」は 30.7%（249 人）、「知らない」は 40.2%（326 人）でした（無回答 2 人）。ピアミーティングを知っている人は 59.5%（482 人）で、4 割の人はその存在を知りませんでした。

参加したことがある人の割合は年代が上がるほど高く、39 歳以下では 20.1%、40 歳代では 28.2%、50 歳代では 33.2%、60 歳以上では 41.3%でした。HIV 陽性とわかってからの年数でみても、0～4 年の 14.0%から、5～9 年 24.6%、10～19 年 32.6%、20 年以上 46.1%へと高くなっていました。一方、「知らない」と答えた人の割合は 39 歳以下で 49.1%と最も高く、若い世代や陽性とわかって間もない人にピアミーティングの情報が届きにくい状況がうかがえます。

図 7-12 ピアミーティングの認知と参加経験（%, N=810）

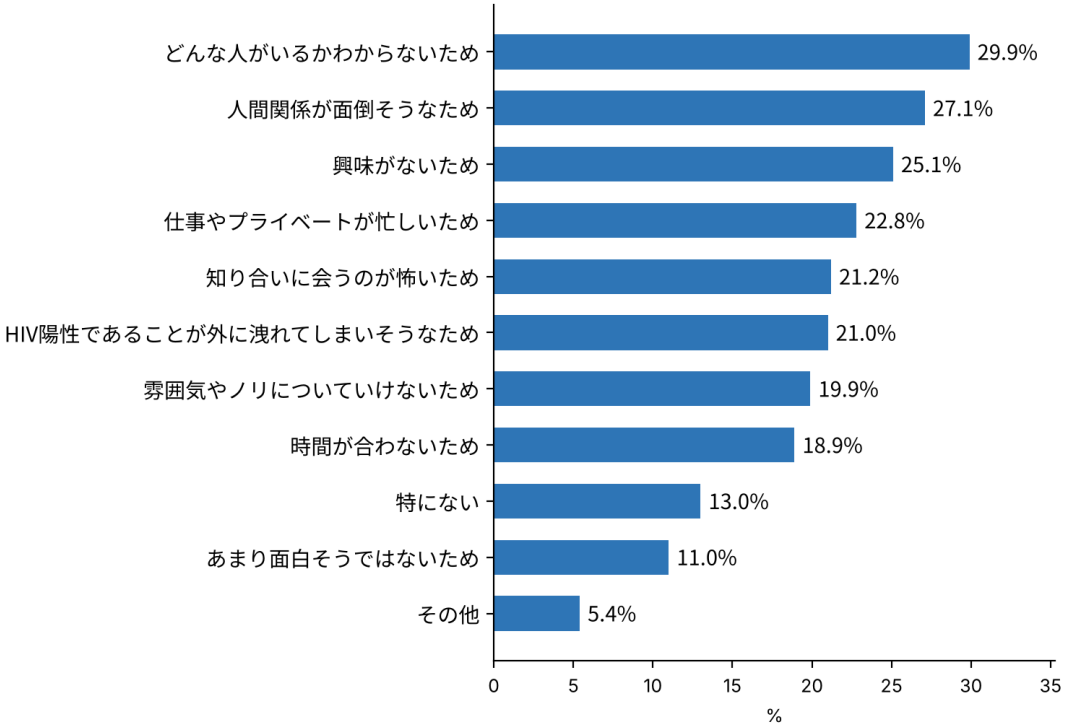


FJ4: N=810　年代別・診断後年数別の値は本文のみ

■ピアミーティングに（あまり）参加しない理由（図 7-13）

知っているが参加したことがない人と、1 回から数回ほど参加したことがある人（391 人）に、（あまり）参加しない理由を尋ねました。最も多かったのは「どんな人がいるかわからないため」29.9%で、「人間関係が面倒そうなため」27.1%、「興味がないため」25.1%、「仕事やプライベートが忙しいため」22.8%と続きました。「知り合いに会うのが怖いため」21.2%、「HIV 陽性であることが外に洩れてしまいそうなため」21.0%と、HIV 陽性であることが知られる不安を挙げた人も 2 割おり、どちらかを選んだ人は 28.4%（111 人）でした。「特にない」は 13.0%でした。

図 7-13 ピアミーティングに（あまり）参加しない理由（%, n=391, 複数回答）

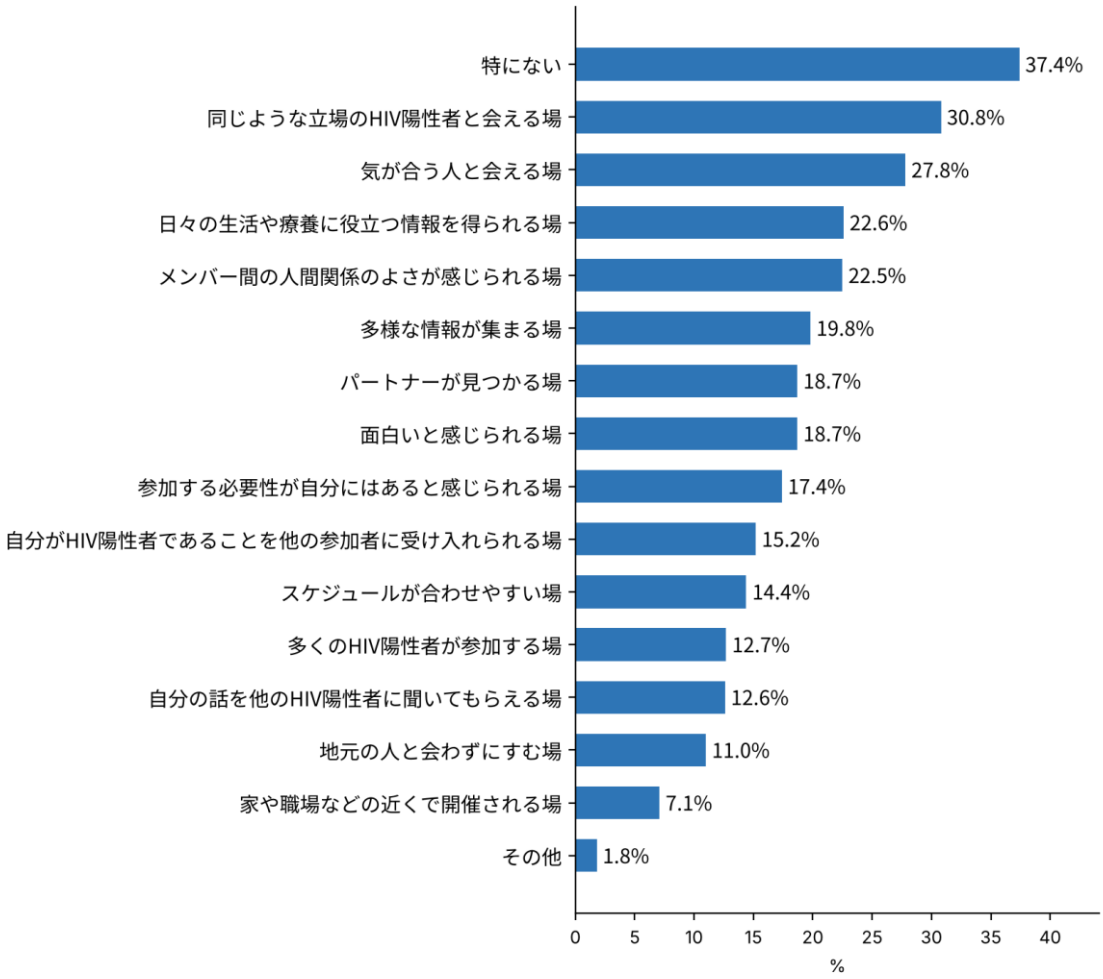


FJ4: n=391（知っているが参加したことがない人・1 回から数回ほど参加したことがある人）

■どのような場であればピアミーティングに参加したいか（図 7-14）

参加したことがあまりない人と知らない人（717 人）に、ピアミーティングがどのような場であれば参加したいかを尋ねました。「同じような立場の HIV 陽性者と会える場」30.8%、「気が合う人と会える場」27.8%、「日々の生活や療養に役立つ情報を得られる場」22.6%、「メンバー間の人間関係のよさが感じられる場」22.5%の順に多く、「多様な情報が集まる場」19.8%、「パートナーが見つかる場」18.7%、「面白いと感じられる場」18.7%が続きました。「特にない」は 37.4%でした。

図 7-14 どのような場であれば参加したいか（%, n=717, 複数回答）



FJ4: n=717（参加したことがあまりない人・知らない人）

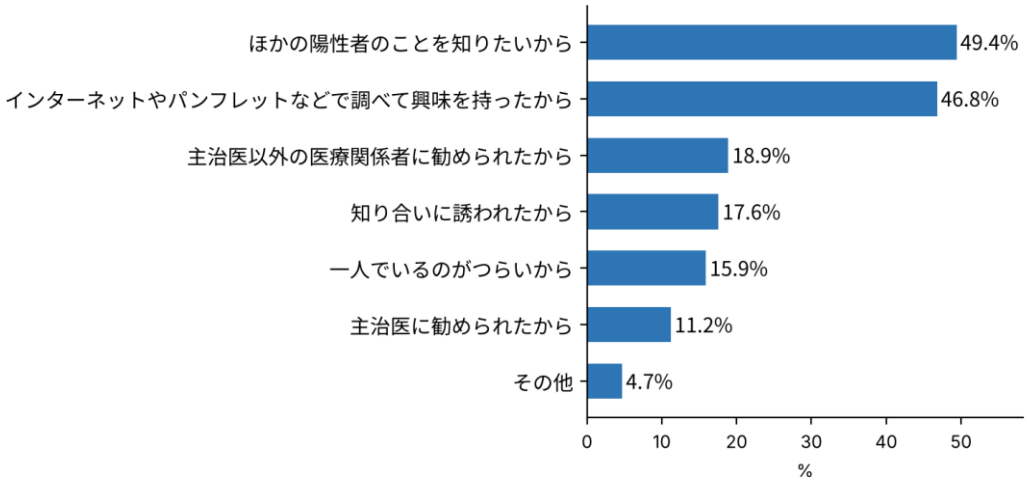
■参加したきっかけとピアミーティング参加後の経験（図 7-15）

参加したことがある 233 人に、参加のきっかけや理由を尋ねたところ、「ほかの陽性者のことを知りたいから」49.4%、「インターネットやパンフレットなどで調べて興味を持ったから」46.8%が多く、「主治医以外の医療関係者に勧められたから」18.9%、「知り合いに誘われたから」17.6%、「一人でいるのがつらいから」15.9%、「主治医に勧められたから」11.2%でした。

ピアミーティングで嫌な思いや経験をしたことが「よくある」は 3.0%（7 人）、「時々ある」は 17.2%（40 人）で、合わせて 2 割でした。「ほとんどない」は 22.0%（51 人）、「全くない」は 57.8%（134 人）でした（回答者 232 人）。嫌な経験の内容を自由記載でみると、特定の参加者が長く話し続ける、常連の参加者どうしで固まっていて入りづらい、年齢や感染歴の長さによる上下関係を感じた、仕事などの個人的なことを詮索され

た、恋愛や性的な目的で近づかれた、知り合いや過去に関係のあった人と顔を合わせた、といった記載がありました。

図 7-15 ピアミーティングに参加したきっかけ・理由（%, n=233, 複数回答）



FJ4: n=233（参加したことがある人）